平土器とともに敷石面を確認したと記している。

三　北部九州の縄文時代

一般に縄文時代の遺跡は東日本で密度が高く、西日本では低いとされる。その原因として東日本にはサケ・マスの遡上する河川が多く、安定した食糧獲得ができることから定住に適していた可能性が指摘されている。同時期の集落の間隔も東日本では五〇〇メートル～一キロメートルであるのに対し、西日本では五～一〇キロメートルと離れているという研究もある。環境の影響が大きい狩猟採集社会では、集落単位の生活圏が食糧獲得のため必要な範囲であったであろう。したがって、集落間の距離が人々の活動範囲を示しているとみられる。

こうした地域差は土器型式の分布範囲にも反映され、早期の押型文土器のように西日本一帯に分布するものを除き、隣接地域の影響を受けながらも九州では独特の土器が作られている。同様な現象は九州内部においてもみられる。九州中央の山地を境に、西北九州・東九州・南九州で土器に変化が生じていることは古くから指摘されている。また、主要な貝塚の分布は熊本県の有明海沿岸部に集中しており、魚介類が主な食料源であったことを示している。

九州においては、草創期に未だ細石刃文化を残していることにも現れるように縄文時代が始まった時点からすでにほかの地域とは異なった発展を始めている。また、土器を正位に据えて施文する東日本に対し、九州では上下逆に文様を施す点も対照的とされる。早期には、関東地方を中心とした撚糸文土器が東日本に広がり、近畿地方を中心とした押型文土器が西日本に広がっていく。

前期の曽畑式土器は、朝鮮半島の影響を受けた西北九州の土器と轟Ｂ式系の土器が半島の櫛目文土器の影響によって文様帯の分割や全面への施文等を受け入れて西北九州で成立したとされる。草創期に東日本で始まり中部地方以北で盛んに行われた縄による施文、いわゆる縄文はこの時期に西に徐々に広がっていくが、九州の曽畑式のみには普及しなかった。同じく前期には西北九州に特徴的な扁平磨製石斧が現れる。この片刃の磨製石斧は刃を削り出す側の胴部を長軸方向にわずかに凹ませることを特徴とし、「西北九州型片刃石斧」とも呼ばれる。この石斧はもっとも古い例で轟Ｂ式土器に伴って出土しているが、その段階では国内で類例が見つかっておらずやはり西北九州が最古の例となる。その後、曽畑式土器が広がっていく状況に対応するように九州内のみに展開していく。

長崎県深堀（1／4）

図２―33　西北九州型磨製石斧

また、中期に九州一円に広がる阿高式土器は、曽畑式土器と同じく胎土に滑石の粉末を混入して独

特の光沢をもつが、その類例は朝鮮半島の水佳里貝塚Ⅱ期の丸底櫛目文の土器にみられる。また、この土器には太線による施文が施されており、両者に共通である。

後期においても九州では朝鮮半島からの影響が見られる。一つは結合式釣針と呼ばれる二つの部品を組み合わせて作る釣針で、今一つは鋸歯状の細かい刃をもつ小型の打製石器で石鋸と呼ばれる。同じ名称の石器が東北地方以東にも分布するが、こちらは大型でヤスリのように使用して石を切断するのに用いたと考えられている。九州の石鋸は骨や木を使った柄に複数埋め込んで、側刃器か石モリとして使ったものと考えられている。

その他に九州では独自の石器がみられる。十字形石器と石庖丁形石器である。十字形石器は四方に刃部をもつ打製石斧に似た石器で、形状が弥生時代の石庖丁に似た石器である。ともに用途は不明であるが、後者は打製のものと磨製のものがある。大分県で出土する石庖丁型石器は、石刃と呼ばれる薄い剥片の周縁部に刃を作り出した打製石器であり、

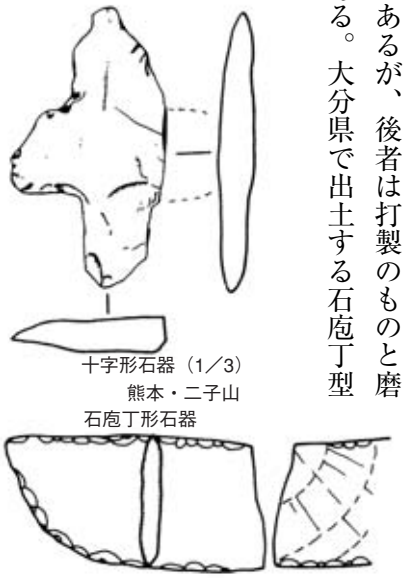

図2—34　九州独自の石器

弥生時代の磨製石器である石庖丁に比べ作り方が違う点と紐かけ穴がないことを除けば非常に似たものといえる。

ここで打製石器の石材の話になるが刃になる鋭利な割れ口を作れる石材は限られており、黒曜石・サヌカイトなどが代表的である。こうした良質な石材が採れる場所は限られており、九州では黒曜石は長崎県腰岳・大分県姫島が、サヌカイトは長崎県多久が代表的である。実際にはそこそこの在地の石材も多く使われるのであるが、こうした良質の石材は山地から遠く離れた遺跡でも出土する。腰岳・姫島産の黒曜石を使った石器は九州各地の遺跡で出土しており、多久産のサヌカイトは大分県左京西遺跡で確認されている。また、徳島県金山産のサヌカイトも同じ遺跡で出土している。石材の移動がどのように行われたかは分かっていないが、こうした遠距離の移動は人から人へと渡されてきたものであろう。

ここでは主に九州の独自性について述べてきたが、九州の縄文文化は決して特殊なものではなく地域の特色にすぎないと考える。土器型式の広がりの移り変わりや、石材の移動といった現象は人々の交流が活発に行われていたことを示している。関門海峡の存在や朝鮮半島に近いという地理的条件、自然環境などがこうした特色を生んだものであろう。縄文時代のこうした人々の交流が、次の弥生時代における水稲耕作の広まりの一つの下地となったと言えよう。